

## ティブルのシビュラ——中世シビュラ文献の紹介と翻訳（1）

伊藤 博明\*

古代の地中海文化の中において生まれたシビュラは<sup>1</sup>、ヨーロッパのキリスト教世界へと、初期のギリシア・ラテン教父を通して伝えられたが、その中でも代表的な人物はラクタンティウス (Lactantius, C. 240-C. 320) である。彼は主著の『神学綱要』( *Divinae institutiones* ) 第1巻において、ローマの文学者ウァロ (116-27 B.C.) の著作『古代の人事と神事』( *Antiquitates rerum humanarum et divinarum* ) から、次のように10人のシビュラに関する記述を引用している。

第1はペルシアの (de Persis) シビュラで、『マケドニアのアレクサンドロスの業績』を書いたニカノルが言及している。第2はリビアの (Libyssa) シビュラで、エウリピデスが『ラミア』の序で言及している。第3はデルポイの (Delphida) シビュラで、クリュシッポスが『予言について』作成した書物において述べている。第4はイタリアのキメリアの (Cimmeria in Italia) シビュラで、ナエウィウスが『ポエニ戦役』において、またピソが『年代記』において名を挙げている。第5はエリュトライの (Erythraea) シビュラで、エリュトライのアポドロスが、彼女は彼の土地の者で、イリオンへ途上にあったギリシア人たちに、トロイアは滅亡しホメロスは虚

偽を書くだろうと予言した、と断言している。第6はサモスの (Samia) シビュラで、エラステネスがサモスの人々の古い年代記の中に彼女を見いだしたと書いている。第7はクマエの (Cumana) シビュラで、アマルテアの (Amalthea) シビュラと呼ばれ、他の人々によってはヘロピレ (Herophile) とかデモピレ (Demophile) とか名づけられている。彼女はタルクイニウス・プリスクスに9巻をもたらした。…第8はヘレスポントスの (Hellenpontia) シビュラで、トロイアの領地下、ゲルギトス市の近くのマルペッソスに生まれ、ポントスのヘラクレイデスは、ソロンとキュロスの時代に生きていたと書いている。第9はピュリギアの (Phrygia) シビュラで、アンキュラで予言した。第10はティブルの (Tiburs) シビュラで、アルブネアの (Albunea) シビュラと呼ばれ、アニオ川辺のティブルで女神として崇められ、この川の底には書物を手にした彼女の姿が見いだされると言われる。その書物の託宣は元老院によってカピトリウムへ運ばれた<sup>2</sup>。

ラクタンティウスは、これらすべてのシビュラが「唯一なる神」( *unus Deus* ) のことを予言しているとして<sup>3</sup>、たとえば、「万物を支配し、唯一統治する一人の神……」という言葉や、「私だけが神であり、ほかに神は存在しない」という言葉をギリシア語で引用している<sup>4</sup>。ラクタ

\* いたう・ひろあき

埼玉大学教養学部教授, 思想史、芸術論

ンティウスの『神学綱要』におけるシビュラの託宣の引用は44箇所にのぼっているが、その典拠は、一部はアンティオキアのティオフィルス (Theophilus Antiochenus, ?-c. 185) の『アルトリュクスへの弁明』 (*Apoloigia ad Autolyicum*) にあるが、ほとんどの託宣は、古代末期に成立した全14巻の『シビュラの託宣』に求められる。ヘクサメーター (六脚韻) のギリシア語で記されたこの書物は、ユダヤ教徒による部分と、キリスト教徒による部分があり、テキストの成立時期、成立場所、構造と内容については多くの議論が存在する<sup>5</sup>。ラクタンティウスは自著において、ウェアロが伝えている古代の地中海沿岸に存在していた、本来は異教の予言者であるシビュラに、ユダヤ・キリスト教起源の託宣を帰したのである<sup>6</sup>。

古代のキリスト教作家、教父の間にシビュラへの言及は数多く見られるが<sup>7</sup>、後代への影響という観点から考えるならば、アウグスティヌスの証言に勝るものはないであろう。彼は『神の国』 (*De civitate Dei*) 第18巻において、とくに古代のシビュラに言及して、次のように述べている。

同じ時代に [ローマが建国された時代に]、ある人々が報告するところによれば、エリュトライのシビュラが予言をした。一方ウェアロは、シビュラは一人ではなく複数いたことを示している。ともかく、エリュトライのシビュラは、キリストについて明白な事柄を記している<sup>8</sup>。

アウグスティヌスは、『シビュラの託宣』に含まれている有名なアクロスティック、すなわち、各行の最初の文字を繋げると「イエス・キリスト、神の子、救世主」となる詩句をラテン語訳によって引用している<sup>9</sup>。また、ラクタンティ

ウスがキリストに関する託宣を自らの著作で引用していることに言及し、その中の6つの託宣を一つにまとめて、イエスの受難と復活を表す託宣を構成している<sup>10</sup>。

他方、古典古代から中世へと伝えられた有名な託宣として、ウェルギリウスの『詩選』 (*Eclogae*) 第4歌に見えるクマエの託宣が挙げられる。第4歌では、全体として一人の子の誕生を待望し、この子の出現によって世界が寛容して、黄金時代に至ることが歌われている。

いまやクマエの予言の最後の時代がやってくる。偉大なる世紀の秩序が再び始まる。いまや処女は帰ってきて、サトゥルヌスの王国が戻る。いまや新しい血筋が、高き天より遣わされる<sup>11</sup>。

ラクタンティウスはすでに、『神学綱要』 (8, 2) において、この歌を「最後の審判」以後の王国を予言するものとして引用していた。彼によれば、詩人が語った「サトゥルヌスが支配する黄金の時代」は、かつて存在していた時代ではなく来るべき時代であって、詩人は神的な靈感に満たされてその光景を見たのである。その後、キリスト教作家たちは、「新しい血筋」 (*nova progenies*) について議論を重ね、ウェルギリウスの詩句は伝えられていった。アウグスティヌスのその例外ではなく、『神の国』 (10, 2) において、『詩選』第4歌13-14行の「あなたの導きのもとに、われわれの罪はすべて消し去られ、この世界は果てしない恐怖から解放されるだろう」という詩句を引用している。ここで詩人が語っているのは、「救い主」による癒しのことであり、それをクマエのシビュラの予言から導きだしたのである。アウグスティヌスはその証拠として「いまやクマエの予言の最後の時代がやってくる」という詩句を引用している<sup>12</sup>。

ところで、キリスト教イコグラフィの確立に多大な寄与をなした、フランスの美術史家エミール・マールは、1899年に公刊された学位論文の中で、ヨーロッパ中世の美術においては、ウァロが挙げている「10人のシビュラの間で、2人のシビュラだけが、すなわち、エリュトライのシビュラとティブルのシビュラだけが知られていた」<sup>13</sup>と述べていた。エリュトライのシビュラについては、ラクタンティウスやアウグスティヌスがとくに名前を挙げており、「最後の審判」を予言するシビュラとして有名であったが、ティブルのシビュラは、ある伝説に関わってその名が知られるようになった<sup>14</sup>。

教皇インノケンティウス3世（在位1198-1216）は、『説教』（*Sermones de sanctiis*, III）の中で、ローマに現れたシビュラについて、次のように言及している。

オクタウィアヌス・アウグスティヌスは、シビュラの指し示すところに従って、天空に息子を抱く処女を見たと言えられる<sup>15</sup>。

この逸話の普及にあたって大きな貢献を為したのは、ヤコブス・デ・ウォラギネ（*Jacobus de Voragine*, c. 1230-1298）の『黄金伝説』（*Legenda aurea*）である。『黄金伝説』の「降誕節」の章には、次のような物語が見いだされる<sup>16</sup>。ローマの元老院は皇帝オクタウィアヌスを賞讃し、彼を神として崇めようとした。そこで皇帝はシビュラを呼んで、将来自分よりも偉大な人間がこの地上に生まれるかどうかを占うように依頼した。イエスが降誕するまさにその日に、オクタウィアヌスは元老院を召集した。シビュラが託宣を授かるために一人部屋にいと、太陽の周りに金色の輪が現われ、その光輪の中に美しい女性が出現した。彼女は祭壇の上に立ち、胸に子供を抱いていた。シビュラはこの光景を皇

帝に指し示した。驚く皇帝の耳元に天から声が轟いて、「これは天の祭壇（*ara coeli*）である」と告げた。シビュラは皇帝に言った。「陛下、この子どもは陛下よりも偉大でございます。よって陛下は、この子供を崇敬なさらなければなりません」。この部屋は、その後に聖母マリアに捧げられ、いまも「天の祭壇の聖母マリア」（*Santa Maria in Ara coeli*）と呼ばれている。この伝説はまた、12世紀成立のローマのガイドブック『ローマの驚異』（*Mirabilia urbis Romae*）における、「サンタ・マリア・イン・アラ・コエリ」（天の祭壇の聖母マリア）教会の由来の説明を通して、人口に膾炙することになったのである<sup>17</sup>。

そして、ヨーロッパ中世は、このティブルのシビュラの名を冠した、ある新しい託宣集を生みだした。それが本稿において翻訳・紹介しようとする〈ティブルのシビュラの託宣〉（テキストは表題を欠いており、仮にこのように呼ぶことにする）である。この託宣集については、130以上のラテン語写本が現存しており、その中で13世紀以前に遡るものが30ほど見いだされる。さらに中世においてこのテキストの一部は、著者としてベーダ・ウェネラビリス（*Beda Venerabilis*, c. 672-735）の名を冠され、『シビュラの言葉の解釈』（*Sibyllinorum verborum interpretatio*）<sup>18</sup>として、また、ヴィテルボのゴットフリード（*Gottfredus Viterbiensis*, c. 1120-c. 1196）の著作『パンテオン』（*Pantheon*）においては『シビュラの予言』（*Vaticinium Sibyllae*）<sup>19</sup>として流布していた。さらに、このテキストについては、オータンのホノリウス（*Honorius Augustodunensis*, ?-c. 1151）が『魂の宝石』（*Gemma animae*）<sup>20</sup>において、またソールズベリー（*Johannes Saresberiensis*, c. 1120-1180）が『ポリクラティクス』（*Polycraticus*）<sup>21</sup>において言及していることも付け加えておきたい。

さて、〈ティブルのシビュラの託宣〉は、「序文」において、ウァロと同様に10のシビュラの名前を挙げている。しかしこの箇所は、ラバン・マウル (Raban Maur, 776-856) の百科全書的な書物『万象について』(De universo) の第15巻第3章「シビュラについて」に全面的に依拠している<sup>22</sup>。本文は、シビュラが自らについて簡単に説明することから始まっている。それによれば、シビュラはプリアムとヘクバの娘で、世界中を旅したあとで、トラヤヌス帝によりローマへ招かれた。それは、100人の元老院議員全員が見た、天空に輝く9つの太陽の夢を解釈するためであった。シビュラは元老院議員たちに向かって、「あなたがたが見た9つの太陽は、すべて未来の世代 (generationes) を示しています」と述べる。第1と第2の太陽は善き世代を、第3の太陽はローマ内の騒乱を示し、第4の世代にキリストが降誕する。第5の世代に、キリストは2人の漁師を選んで、人々にたいして説教するように遣わす。第6の世代に、「かの都市」(エルサレム) が3年半にわたって攻囲される。第7の世代に、2人の王がヘブライの地で迫害を行なう。そして、第8の世代に、ローマに致命的な災厄が生じる。ここまでは、いわゆる「事後の予言」であり、第9の世代に関するものが真正の「未来の予言」となっている。それは、世界の終末と「最後の審判」を歌うものである。まず、最後の皇帝コンスタンスが出て112年間統治し、全世界をキリスト教化してゴグとマゴグを打ち破る。その後アンチキリストが現われて酷い迫害を始め、エノクとエリヤを殺害する。しかし彼も大天使ミカエルによって滅ぼされる。そして、ラテン語版は、「裁きの徴として……」で始まるアクロスティックの引用をもって終わっている。この最後の箇所は、冒頭と同様に、ラバン・マウルの『万象について』に由来すると考えられる<sup>23</sup>。その他の箇所

で、先行するテキストが同定される場合はきわめて少ない。いくつかの箇所について『シビュラの託宣』からの引用が、またウェルギリウスの著作からの影響が指摘されてはいるが、全体的にはオリジナリティに溢れたテキストとなっており、そのことがまた、このテキストの特異性を浮かびあがらせている。

〈ティブルのシビュラの託宣〉のテキストの起源と伝搬については、いまだに解明されていない点が多い。1898年に最初のラテン語批評版を公刊したエルンスト・ザッカーは、内容の分析に基づいて、ギリシア語の原本は360年代に成立し、それがまもなくラテン語に訳されたと考えた。そして、現在に伝えられているテキストの原型は、11世紀初期に北イタリアで成立したと想定している<sup>24</sup>。その後、M・メルカーティがギリシア語版を発見し<sup>25</sup>、ポール・アレクサンダーがそのテキストを校訂して、詳細な検討を加えた<sup>26</sup>。アレクサンダーは、それが500年より少しのちに、レバノン東部の町バールベク (ギリシア名ヘリオポリス) 付近で記されたものと推定して、「バールベクの予言」と呼んでいる。他方、デイヴィッド・フラッサーは、このテキストに見られる9つの太陽の夢は、1世紀後半のユダヤ教的・キリスト教的予言にまで遡ると考えている<sup>27</sup>。これら以外にも、アラビア語版<sup>28</sup>や中世フランス語版<sup>29</sup>も発見されており、今後、さらなる研究が望まれている<sup>30</sup>。

本翻訳の底本は、エルンスト・ザッカーが1898年に刊行した『シビュラのテキストと研究』(Sibyllinische Texte und Forschungen. Pseudomethodius, Adso und die tiburtinische Sibylle) に収められているものである (pp. 177-187)。ザッカーは、テキストの校訂にあたって、5つの写本 (エスコリアル写本、1047年頃；ヴァティカン写本、11-12世紀；デュッ

セルドルフ写本、12-13 世紀；パリ写本、12 世紀；パリ写本、15 世紀）と、上述したベーダの著作集とヴェテルボのゴットフリードの『パンテオン』に所収のものを利用している。なお、アレクサンダー校訂のギリシア語版の翻訳、およびそれとラテン語版との比較検討については、別途、発表する予定である。

#### <注>

- 1 古代におけるシビュラの伝承については以下を参照。  
Bouché-Leclercq (1889); Rzach (1923); Park (1988); Potter (1990).
- 2 1, 6, 8-12, ed. Monat, pp.76-80.
- 3 1 14, ed. Monat, p.80.
- 4 1 15, ed. Monat, p.82.
- 5 テキストは Geffcken (1902); Kurfess (1951)、主たる研究はRzach(1923); Collins (1972); Idem (1987); Nikiprowetsky (1970); Idem (1987)である。
- 6 ラクタンティウスと『シビュラの託宣』との関係については Pichon (1910), pp.209-213; Ogilvie (1978), pp.28-33; Guillaumin (1978), pp.186-189 を参照。
- 7 概略は Thompson (1952); Guillaumin (1978); Park (1988), pp.152-173 を参照。
- 8 18, 23, CC48, p.613.
- 9 Ibid. Cf. *Oracula Sibyllina* 8, 217-243, ed. Geffcken, pp.153-155.
- 10 18, 23, CC48, p.614.
- 11 IV, 4-7.
- 12 『詩選』の中世における伝承については Prüm (1929); Idem (1931-32); Kurfess (1953); Idem (1954); Courcelle (1957) を参照。
- 13 Mâle (1899), p.16. Cf. Mâle (1922), p.255.
- 14 中世におけるシビュラの伝統については McGinn (1985); Dronke (1992) を参照。美術史的な考察は、マールの前掲書に加えて Rossi (1905); Freund (1936) を参照されたい。
- 15 *PL* 217, col.457C.
- 16 Ed. Graesse, pp.44-45.
- 17 以下の研究を参照。Hulsen (1907); Monteverdi (1940); Guarducci (1947-49); Vayer (1963); D'Onofrio (1973), pp.53-70; Tomei (1982); Carta-Russo (1988), pp.11-17, 46, 148.
- 18 *PL* 90, coll.1181-1186.
- 19 *MGH*, SS XXII, pp.145-147.

- 20 3, 134, *PL* 172, col.679.
- 21 2, 15, *PL* 199, col.429.
- 22 *PL* 111, col.420B.
- 23 Cf. Ibid., col.421A.
- 24 Sackur (1989), pp.134-135.
- 25 Mercati (1949), pp.473-481.
- 26 Alexander (1967).
- 27 Flusser (1978).
- 28 Cf. Schleifer (1910); Ebied and Young (1976); Idem (1977).
- 29 Cf. *Le Livre de Sibyle* de Philippe de Taon; Haffen (1987).
- 30 Cf. McGinn (1985), pp.26-29.

#### 文献

- Alexander, Paul J. (1967): *The Oracle of Baalbek: The Tiburtine Sibyl in Greek Dress*, Washington, D.C.
- (1980): “The Diffusion of Byzantine Apocalypses in the Medieval West and the Beginnings of Joachimism,” in A. Williams (ed.), *Prophecy and Millenarianism. Essays in Honor of Majorie Reeves*, Harlow, pp.67-100.
- Alexandre, C. (1856): *Excursus ad Sibyllina*, Paris.
- Augustinus: *De civitate Dei*, ed. B. Dombart – A. Kalb, Corpus christianorum 47-48, Series Latina, Turunhout, 1955. [アウグスティヌス『神の国』、赤城善光他訳、全5巻、「アウグスティヌス著作集」11・15巻、教文館、1980-1983年；服部栄次郎・藤本雄二訳、全5巻、岩波文庫、1982-91年]
- Beda Venerabilis, *Sibyllionorum verborum interpretatio*, in *Patrologiae cursus completus, Series Latina*, vol. 90.
- Bouché-Leclercq, A. (1880): *Histoire de la divination dans l'antiquité*, II, Paris.
- Carta, Maria e Russo, Laura (1988): *S. Maria in aracoeli*, Roma.
- Collins, John J. (1973) : *The Sibylline Oracles of Egyptian Judaism*, Missoula.
- (1987): “The Developpment of the Sibylline Tradition,” *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, Berlin, II/20, pp.421-453.
- Courcell, P. (1957): “Les Exégèses chrétiennes de la quatrieme Eglogue,” *Revue des études anciennes*, 54, pp.294-319.
- D'Onofrio, Cesare (1973): *Renovatio romae. Storia e urbanistica dal Campidoglio all'EUR*, Roma.

- Dronke, P. (1992) : “Hermes and the Sibyls : Continuations and creations,” in Idem, *Intellectuals and Poets in Medieval Europe*, Roma, pp.219-241.
- Ebied, E. – Young, M. (1976): “A newly discovered Version of the Arabic Sibylline Prophecy,” *Oriens Christianus*, 60, pp.83-94.
- (1977): “An unrecorded Arabic Version of a Sibylline Prophecy,” *Orientalia Christiana Periodica*, 43, pp.279-307.
- Flusser, David (1978): “An Early Jewish-Christian Document in the Tiburtine Sibyl,” in *Paganisme, Judaïsme, Christianisme: Influence et affrontements dans le monde antique. Melanges offerts à Marcel Simon*, Paris, pp.153-183.
- Freund, L. (1936): *Studien zur Bildgeschichte der Sibyllen in der neueren Kunst*, Hamburg.
- Geffecken, Joahannes (1902): *Oracula Sibyllina*, Berlin. [『シビュラの託宣』、柴田有詔、日本聖書学研究所編「聖書外典偽典」第3巻、教文館、1975；佐竹明詔、同第6巻、1976に所収]
- Gottfredus Viterbiensis, *Pantheon*, in *Monumenta Germaniae Historica*, SS XII, Hannover, 1872.
- Guillaumin, Marie-Louise (1978): “L’exploitation des «Oracles Sybillins» par Lactance et «le Discours a l’assemblée des saints»,” in J. Fontine et M. Perrin (ed.), *Lactance et son temps*, Paris, pp.189-200.
- Haffen, J. (1987): *La prophétie de la Sibylle Tiburtine*, Paris.
- Holder-Egger, O. (1890): “Italienische Prophetieen des 13. Jahrhunderts I,” *Neues Archiv der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde*, 15, pp.155-78.
- (1905): “Italienische Prophetieen des 13. Jahrhunderts II,” *Neues Archiv der Gesellschaft für ältere deutsche Geschichtskunde*, 30, pp.328-35.
- Honorius Augustodunensis, *Gemma animae*, in *Patrologiae cursus completus, Series Latina*, vol. 172.
- Haffen, Josiane (1984): *Contribution à l’étude de la Sibylle médiévale*, Paris.
- Hulsen, C. (1907): *Legend of the Aracoeli*, Roma.
- Innocentius III, *Sermones de sanctiis*, in *Patrologiae cursus completus, Series Latina*, vol. 217.
- Jacobus de Voragine, *Legenda aurea. Vulgo Historia Lombardica Dicta*, ed. Th. Graesse, Dresden, 1890.
- Johannes Saresberiensis, *Policraticus*, in *Patrologiae cursus completus, Series Latina*, vol. 199.
- Kurfess, A. (1951): *Sibyllinische Weissagungen*, Berlin.
- (1953): “Virgilis vierte Ekloge und dei Oracula Sibyllina,” *Historisches Jahrbuch*, 73, pp.120-127.
- (1954): “Vergils vierte Ekloge bei Hieronymus und Augustinus. ‘Iam noua progenies coelo dimittitur ab alto’ in christlicher Deutung,” *Sacris erudiri*, 4, pp.5-13.
- Lactantius, *Divinae institutiones*, ed. S. Brandt, CSEL 19, Wien, 1890, pp.1-672 / ed. P. Monat, Source Chretinne, Paris, 1973 sqq.
- Mâle, Emile (1899): *Quomodo Sibyllas recentiores artifices repraesentaverit*, Paris.
- (1922): *L’Art religieux de la fin du Moyen-Age en France*, Paris. [エミール・マール『中世末期の図像学』(上・下)、田中仁彦・池田健二・磯見辰典・平岡忠・細田直考訳、国書刊行会、2000年]
- McGinn, Bernard (1985): “Teste David cum Sibylla: The Significance of the Sibylline Tradition in the Middle Ages,” in J. Kirshner and S.F. Wmple (eds.), *Women of the Medieval World. Essays in Honor of John H. Munday*, Oxford, pp.7-35.
- Mercati, S.G. (1949): “È stato trovato il testo greco della Sibilla Tiburtina,” *Melanges Henri Gregoire. Annuaire de l’Institut de Philologie et d’Histoire orientales et slaves*, 9, pp.473-481.
- Monteverdi, A. (1940): “La leggenda di Augusto de dell’Ara celeste,” in *Atti del V Congresso nazionale di studi romani*, Roma, vol.2, pp.462-470.
- Nikiprowetzky, Valentin (1979): *La troisième Sibylle*, Paris.
- (1987): “La Sibylle juive et le ‘Troisième Livre’ des ‘Pseudo-Oracles sibyllins’ depuis Charles Alexandre,” *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, Berlin, II/20, pp.460-542.
- Ogilvie, R.M. (1978), *The Library of Lactantius*, Oxford.
- Park, H.W. (1988): *Sibyls and Sibylline Prophecy in Classical Antiquity*, London – New York.
- Pichon, R. (1901): *Lactance*, Paris.
- Potter, D.S.: *Prophecy and History in the Crisis of the Roman Empire : A Historical Commentary on the Thirteenth Sibylline Oracle*, New York.
- Prümm, K. (1929): “Das Prophetenamt der Sibyllen in der kirchlicher Literatur mit besonderer Rücksicht auf der Deutung 4. Ekloge Virgils,” *Scholastik*, 4, pp.221-246, 498-533.
- (1931-32): “Die Hielserwartung der vierten Ekloge Virgilis im Widerstreit neuerer Ansichten,” *Scholastik*,

6, pp.539-568; 7, pp.239-257.

Raban Mauro, *De universo*, in *Patrologiae cursus completus, Series Latina*, vol. 111.

Rossi, Angelica (1915): “Le Sibille nelle arti figurative italiane,” *L’arte*, 18, pp.209-221, 272-285, 427-458.

Rzach, A. (1923): “Sibyllen,” in Pauly und Wissowa, *Real-Encyclopadie der classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart, II A 2, coll.2070-2103.

Sackur, E. (1989): *Sibyllinische Texte und Forschungen*, Halle, 1898.

Schleifer, J. (1910): “Die Erzählung der Sibylle,” *Denkschriften der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*. Philosophisch-Historische Klasse, 53, Abhandlung I.

Thompson, B. (1952): “Patristic Use of the Sibylline Oracles,” *Review of Religion*, 16, pp.115-136.

Tomei, A. (1982): “Un contributo per il perduto affresco dell’Aracoeli,” *Storia dell’arte*, 44, pp.83-86.

Vayer, L. (1963): “L’affresco absidale di Pietro Cavallini nella chiesa di S.Maria in Aracoeli in Roma,” *Acta Historiae Artium Academiae Scientiarum Hungaricae*, 9, pp.39-73.

Verhelst, D. (1973), “La préhistoire des conceptions d’Adson concernat l’Antichrist,” *Recherches de Théologie Ancienne et Médiévale*, 40, pp.52-103.

伊藤博明『ヘルメスとシビュラのイコノロジー——シエナ大聖堂に見るルネサンス期イタリアのシンクレティズム研究』、ありな書房、1992年

## 〈ティブルのシビュラの託宣〉

### 序言 (Incipit prologus)

シビュラとは、一般的には、すべて女性の予言者であり、神の意志を人間に対して解釈し、未来の出来事を告知するのが常である、と言われている。そして、学識ある権威者たちは、10人のシビュラがいたと、すなわち、第1にペルシアのシビュラが、第2にリビアのシビュラが、第3に、トロイア戦争以前に予言したデルポイのシビュラが、第4に、イタリアのキメリアのシビュラが、第5に、自らの詩句を語ったエリュトライ島にちなんで名づけられるバビロニアのエリュトライのシビュラが、第6にサモス島

にちなんでそう呼ばれるサモスのシビュラが、第7にアマエルティアの、あるいはキメラ [クマエ?] のシビュラが、第8にヘレスポントスのシビュラが、第9にピュリギアのシビュラが、第10にギリシア語でティブルの、ラテン語でアブルネア [アルブネア?] のシビュラがいたと伝えており、そして、ティブルのシビュラの詩句には、神とキリストについての多くの記述が含まれている。

### 夢の解釈 (Incipit explanation somnii)

このシビュラはプリアモス王の息女であり、ヘクバという名の母から生まれ、ギリシア語でティブルと呼ばれ、ラテン語ではアブルネアという名前である。彼女は、地上の様々な場所を訪ねて、アジア、マケドニア、エロストキア、アガグルデア、キリキア、パンフィリア、ガラティアで予言した、そして、世界のこの部分を予言で満たしてから、エジプト、エチオピア、バガダ[バグダッド? ]、バビロニア、アフリカ、リビア、ペンタポリス、マルリタニア、パラリヌムに行った。彼女はこれらすべての地域において予言し、予言の霊に満たされて、善き者には善き事柄を、悪しき者には悪しき事柄を予言した。そしてわれわれは、彼女が自らの予言において真実を語ったことを、また、最近においては未来について予言したことを知っている。

さて、彼女の名声をローマの貴顕たちは聞いていたので、すぐにトロイアの皇帝の面前でそれについて報告した。そこで、皇帝は使者たちを彼女のもとに送って、最高の礼を尽くして、ローマに連れ帰った。

ローマの元老院の100人は、ある一夜に同一の夢を見た。彼らの各々は眼前に、天空に9つの太陽の一つ一つが、互いに異なる姿で現れるのを見た。第1の太陽は輝き、全地を照らしていた。第2の太陽はより輝き、大きく、明晰さ

を持っていた。第3の太陽は赤々とした色で、火のように恐ろしく、光輝に満ちていた。第4の太陽は赤々としてやむことなく、昼に4つの光線を放っていた。第5の太陽は暗く、赤々とし、雷鳴におけるがごとく燦めいていた。第6の太陽はより暗く、蠍の針のような突起をもっていた。第7の太陽は恐ろしく、赤々とし、中央に鋭い剣をもっていた。第8の太陽は大きく、中央の色は赤々としていた。第9の太陽はきわめて暗く、ただ一条の光線を放つだけであった。

そして、かのシビュラがローマに入ると、彼女を見たローマ市民は、そのこの上もない美しさに驚嘆した。彼女の容貌は優雅で、表情は輝かしく、語る言葉は雄弁で、あらゆる美しさを備えており、聴く者たちに甘美な話し方を示した。夢を見た人々がやってきて、彼女に語った。

「師にして女主人よ——というのも、あなたの身体は堂々として、きわめて美しく、それはあなた以外の女性には見られないものなのですから——、われわれすべてが、あの一夜に見た夢がいかなる未来を予示するものなのかを、どうかお願いしますから、明らかにしてください」。彼女はそれに答えて、彼らに言った。「汚物でいっぱい、さまざまな塵芥で汚されている場所で、この幻視の秘密を明らかにするのは正しくありません。こちらに来て、アウエンティヌムの丘へ登ることにしましょう。そこで私は、いかなる未来がローマ市民に訪れるのかを告げましょう」。彼らは、彼女が述べたように行った。彼らが見た幻視について尋ねられると、彼らは物語った。そして、彼女は彼らに次のように言った。

「あなた方が見た9つの太陽は、すべて未来の世代を予示しています。確かにあなた方が見た太陽は異なっていたわけですが、また、人間の子どもたちにおける生も異なることとなります。第1の太陽は第1の世代です。人々は単純で明快で、自由を愛し、快活で穏和で寛大で、

進んで貧者を助け、十分な知恵があります。第2の太陽は第2の世代です。人々は立派に生活し、増加し、神を大いに敬い、地上で悪意なしに交流します。第3の太陽は第3の世代です。人々は互いに反目し、ローマでは頻繁に争いが起きます。第4の太陽は第4の世代です。人々は真なるものを拒絶していましたが、その時に、ヘブライ民族から、マリアという名の女性が出て、ヨセフという名の者と婚約し、彼女からは、この男と交わることなく、聖霊によって、イエスという名の神の子が生み出されます。そして彼女自身は、出産の前も出産の後も処女のままだのです。それゆえ、彼女から生まれる者は、すべての預言者が予告していたように、真の神であり真の人間です。そしてヘブライ人たちの律法は成就します。同時に彼は、自らのものを付け加え、かの王国は永遠に存続します。彼が生まれる際には、天使たちの軍勢が左右に現れて、こう語ります。〈天上では神に栄光を、地上では善き意志をもった人間に平和を〉。そこで、彼の上からある声が来て、言います。〈これは私の愛する子である。彼に耳を貸しなさい〉。

ところが、ヘブライ人の祭司たちは、この言葉を聞いて憤慨し、彼女に言った。「その言葉は恐ろしいものです。この女王を黙らせなさい」。シビュラは彼らに答えて言った。「ユダヤ人たちは、言われたごとく、それは必ず起こりますが、あなた方は彼のことを信じないでしょう」。そこで彼らは言った。「われわれは信じません。というのは、神はわれわれの父祖たちに言葉と戒めを与えられたからであり、神は自らの手をわれわれから取り去るのでしょうか」。再び、彼女は彼らに答えた。「[聖書に]書かれているように、天の神は自ら、子を生み出しますし、彼は父に似た者です。その後、幼児の彼も次第に成長し、他方、地上では王たちと君主たちが彼の前に立ちます。その時期に、皇帝はアウグストゥス[神



聖な] という際だった名を得て、ローマを統治し、地上の万人は彼に従います。その後、ヘブライ人の祭司たちはイエスに対抗するために集結します。というのは、彼は多くの事柄を行ったので、彼のことが分かったからです。そして彼らは、神に対して汚れた手で平手打ちを加え、聖なる顔に汚い唾を吐きかけます。他方、彼は聖なる背中に鞭を受け、殴打されながら沈黙を守ります。さらに彼らは、食物の代わりに胆汁を、喉の渇きには酢を与えます。そして彼らは、彼を木に吊り下げて殺します。しかし、それらは何の効力もありません。というのは、三日の後に彼は蘇り、自らの姿を弟子たちの前に示して、弟子たちが見ている最中に、彼は天へと昇り、そして、彼の統治には終わりが無いのですから」。

彼女はローマの貴顕たちに言った。「第5の太陽は第5の世代です。イエスはガリアの2人の漁師を選び、自らの律法を彼らに与えて言います。〈行って、私から受け取った教えを、すべての人々に与えなさい。そして、72枚の板にすべての民を従わせなさい〉。第6の太陽は第6の世代です。この都市は、3年6ヶ月の間、征服されます。第7の太陽は第7の世代です。二人の王が現れて、神のゆえに、ヘブライ人の土地で多くの迫害がなされます。第8の太陽は第8の世代です。ローマは破壊され、妊婦たちは苦悩と苦痛の中で叫び声を上げて言います。〈われわれが産むことができる、あなたはお考えでしょうか〉。第9の太陽は第9の世代です。二人の王がローマから、多くの者が死する中で現れます。それから二人がシリアから、彼らの海の真砂ごとき、無数の軍勢が現れ、カルケドンまで、ローマ人の都市と領地を獲得します。そして、血が多く流れます。以上のことのすべてが生じると、それらについて思い起こされるように、市民と民族は彼らに恐れおののき、東方へと散

り散りになります。そののち、二人の王がエジプトから現れて、4人の王と彼らの軍隊を圧倒して殺害します。そして、3年6ヶ月の間支配します。そののち、Cという名の別の王が現れ、戦闘において能力のある彼は、30年にわたって支配し、神に対して神殿を建造し、律法を成就し、神のゆえに、地上に正義をもたらします。

そして、こののち、別の王が現れて、少しの期間統治しますが、打倒されて殺されます。さらにそののち、Bという名の王が現れ、Bに代わってアウドン王が続き、そして、アウドンからAが引き継ぎ、このAから [別の] Aが生まれ、この第2のAは戦争好きの軍人で、このA自身からRという名の王が生まれ、RからLが生まれて、その後は、19人の王が続きます。彼らののちに、Kという名のフランクのサリクス王が現れます。彼は偉大で、敬虔深く、有能で、慈悲深く、貧者に正義を施します。実際、彼は大きな徳に恵まれており、彼が道を歩めば、木々が彼に対して先端を傾けるほどです。また水たまりも彼に出会うと彼を避けるほどです。ローマ帝国において、彼の前にも彼の後にも、彼に匹敵する者はいません。そして、彼の後にLという名の王がやってきて、その後にBという名の者が統治し、Bの後に12Bが続き、BからAが引き継ぎ、彼は戦闘好きで、戦争において勇ましく、海上でも地上でも多くのものを打ち倒します。彼は敵対者の手に落ちることなく、王国の外で流浪者として死に、彼の魂は神の手に委ねられます。

それから、Vという名の別の王が、サリクスから、またランゴバルドから現れて、戦闘者たちに対して、またあらゆる敵対者に対して、この地上に権力を打ち立てます。そして、その時代に、Oという名の王が進み出ます。彼はきわめて能力があり、勇ましく、善良で、貧者たちに正義を施し、正しく裁きます。そして、この

〇から別の、きわめて能力のある別の〇が進み出て、彼のもとで、異教徒たちとキリスト者たちの戦闘が起こり、ギリシア人からは血が流れています。彼の心は神の手の中にあり、彼は7年間統治します。そして、彼の妻から〇という名の王が生まれます。この王は血気盛んで、非道で、信仰にも真実にも欠き、彼によって多くの災難が起こり、多くの血が流され、そして、彼の権力において教会が破壊されます。他の土地においても多くの災厄と争いが生じます。カッパドキアでは民族間の争いが生じて、彼が戸口から小屋に入る事のない時代には、人々はパンフィリアに拘禁されます。この王は3年の間統治します。

そして、彼の後にAという名の王が現れて、その時期に、多くの戦いが[アガレニ人とギリシア人との間で]起こります。[すなわち、異教徒たちの間で、多くの争いと戦いが起こります。]シリアは征服され、ペンタポリスは占領されます。王自身はランゴバルド族の出身です。それから、サリクスEとう名の王が現れてランゴバルド族を征服し、戦いと争いが絶えなくなります。サリクス王自身は勇敢で、強靱で、またたく間に王となります。それから、アガレニ人と僭主たちがタレントとバッコを占領し、多くの都市を略奪します。そしてローマに向かおうとするでしょうが、そのことに、神々の中の神、主たちの中の主以外の者は逆らうことはできません。それから、アルメニア人がペルシアを徹底的に滅ぼし、略奪された都市は回復されません。そして、ペルシアは急いで、東方に境界を据えて、今度は、ローマ人を征服して、しばらくの間、平和を享受します。しかし、ギリシア人の王で、好戦的な男がヒエロポリスに侵入し、神々の神殿を破壊します。そして、イナゴとバッタが来襲し、カッパドキアとキリキアのあらゆる樹木と果実を食べるので、人々は飢

えに苦しみ、のちにも、それ以上の苦しみはありません。

そして、別のサリクス王、強靱で好戦的な者が現れて、多くの隣人や親類から嫌われることとなります。そして、この時期には、兄弟たちが殺しあい、父が息子を殺め、兄弟が姉妹と交わり、人間にとって多くの許されざる悪行が地上で行われ、老人は乙女と同衾し、悪しき聖職者は少女を騙して同衾します。司教たちは悪行を旨とする派に属し、血が大地に流れます。聖職者たちは神殿を汚し、人々の中には汚れた放蕩と男色の犯罪がはびこり、彼らの表情は歪んだものとなります。人々は強奪し、暴行し、正義を嫌い、虚偽を愛し、ローマの裁判官は変転します。つまり、今日は正しく判決していても、別の日には、金銭を受け取ったために、正しくではなく、誤って判決されるのです。この時期には、人々は強欲で、好色で、嘘つきで、虚偽の報酬を愛します。そして、法律と真理は破壊されます。大地では様々な場所で地震が起こり、島々の都市は海の中に沈み、人間にも家畜にも疫病が蔓延し、人々は死に瀕します。地上は敵どもによって荒廃させられ、虚しい神々だけが彼らを励まします。

この後に、Bという名の王が現れ、彼のもとで戦争があり、彼は2年間統治します。それから、Aという名の王が現れ、しばらくの間、王国を支配します。彼はローマにやってきて占領しますが、彼の生涯にわたって、敵どもの手にかかって自らの魂を殺されることなく、善良で偉大であり、貧者たちに正義を施し、長い間生きます。こののち、Bという名の別の王が現れ、このBに12人のBが続きますが、この王はランゴバルド出身に、100年まで統治します。彼の後に、Bという名のフランク出身のサリクスが現れます。その時から、世界の始まりからなかったような苦難が始まります。この時期には、

多くの戦いと多くの苦痛があり、血が流れでて、地震が都市と地域に起こり、地上の多くが占領されます。敵どもに抵抗する者はいません。というのは、その時、神は地上に対してお怒りになっているからです。ローマは迫害と武器のもとで征服され、王の手の中に収められ、人々は強欲で、暴虐で、貧者を嫌い、潔白な者を迫害し、悪辣な者を支援します。人々は不正で、無価値な者となり、断罪する者は追放され、囚われます。そして、地上において彼らに抵抗する者や、彼らの悪行や強欲さを指摘する者はいません。

その時、コンスタンスという名のギリシア人の王が現れ、ローマ人とギリシア人の王となります。彼の体躯は堂々とし、容貌は立派で、顔は輝いており、各々の四肢は見事に調和しています。彼の統治は112年続きます。その期間には、多くのものが豊かになり、大地は豊富に所産を生みだし、小麦1升が1デナリウス、ワイン1升が1デナリウス、油1升が1デナリウスで売られます。そして、王自身が書記を目の前にして、こう告げます。〈それゆえ、ローマ人の王は、あらゆる王国がキリスト教徒に属するものとして、自らに要求する〉。それゆえに、彼は異教徒たちの島々と都市を破滅させ、神々たちの神殿をすべて破壊します。そして、あらゆる異教徒を洗礼へと導き、あらゆる聖堂に、イエス・キリストの十字架を立てます。まず先んじて、エジプトとエチオピアが神に自らの手を差し出します。イエス・キリストの十字架を崇拜しない者は剣によって罰せられます。そして、120年が過ぎると、ユダヤ人は主へと改宗して、彼の墓は万人によって称えられます。その時期に、ユダは救済され、イスラエルは安住することになります。

その時期に、ダンの民族から、アンチキリストという名の、不正の君主が現れます。彼は破

壊の子、驕慢の君主、誤謬の教師、悪行の充満であり、世界を破壊し、誤った幻視によって予兆と大げさな徴を示します。彼は魔術によって、天から火が降ってくるように見えさせ、多くの者を惑わします。そして、年は月のように、月は週のように、週は日のように、日は時のように[時は分のように]減じていきます。そして、北の方から、アレクサンデル [インドの王] が封じ込めた邪悪な民族、すなわち、ゴグとマゴグが現れます。これらは 22 の王国であり、その数は海の真砂ほどです。

他方、ローマ人の王がこのことを聞いて、軍隊を招集し、彼らを圧倒して、根絶するまでに打ち倒します。それから、彼はエルサレムにやってきて、そこで、頭から王冠を取り、王に属するものすべてを取り、王国をキリスト教徒の、父なる神とその子キリストに捧げます。しかし、ローマ皇帝がこのことを止めると、アンチキリストが公然と姿を現し、イスラエルの主の住まいに座ります。彼が支配している間に、2人の有名な人物エリヤとエノクが、主の到来を告げるために活動しますが、アンチキリストは彼らを殺します。しかし、3日後に、彼らは主によって復活させられます。それから、その前にもその後にもないような大きな迫害が起こります。しかし主は、選ばれた者たちのために、その日々を縮め、そして、アンチキリストは、主の力に基づき、大天使のミカエルによって、オリーブの丘で殺されます。

そのシビュラは、以上のこと、また多くの他のことをローマ人たちに予言した後で、いかなる徴のもとで、主は審判を下すためにやってくるのかを予言して、次のように語った。

「裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう。

.....

天からは火と硫黄の流れが落ちてくるだろう。

そして、主は、各人の所業に基づいて審判を下し、不敬な者たちは永遠の火のゲヘナに送り、他方、敬虔な者たちは、永遠の生命という報酬を受け取ります。そして、天は新しくなり、大地も新しくなり、双方ともに永遠に保持されますが、海は消失します。そして主は聖人たちの間で統治し、聖人たちは、主とともに未来永劫に統治するのです。アーメン」。